

わんにゃん通信 11月号 担当：田中

今回は子宮蓄膿症についてです。

子宮蓄膿症は子宮に細菌が入って炎症を起こし、子宮内に膿がたまる病気です。

避妊手術をしてない雌犬で発情終了1~2カ月後に発症することが多く、膿を排出する「開放型子宮蓄膿症」と、排出しない「閉鎖型子宮蓄膿症」の2種類に分けられます。

開放型子宮蓄膿症…子宮の出口が開通している状態

子宮の膿が外陰部から出てくるので、飼い主さんも気づきやすいです。

閉鎖型子宮蓄膿症…子宮の出口が塞がっているため、子宮に膿が蓄積している状態

開放型と比べて発見が遅れてしまうだけでなく、症状も重く、子宮破裂を起こしやすいと言われています。

子宮蓄膿症が悪化すると、子宮内部の毒素が全身に回ってしまい、腎不全や肝障害、敗血症などの重大な合併症を引き起こすほか、子宮が破裂して膿が腹腔内に漏れ出すと腹膜炎を発症し、短時間で死亡してしまうこともあります。

原因

子宮蓄膿症は、子宮内に細菌が入り込むことで発症する病気です。本来、子宮には細菌を防ぐ力が備わっていますが、黄体ホルモンが長期間分泌されると抵抗力が弱まり、細菌に感染しやすくなります。

とくに、発情期後の黄体期は黄体ホルモンが多く分泌され、体の免疫機能も低下しているため、細菌感染を起こして子宮蓄膿症を発症しやすくなります。

症状

- よく水を飲む
- よくオシッコが出る
- 食欲がなくなる
- 元気がなくなる
- 嘔吐や下痢をしている
- しきりに陰部をなめる
- 陰部から膿が出る
- 外陰部が腫れる
- 発情出血がいつもより長期間続く
- 目の充血

その他にも

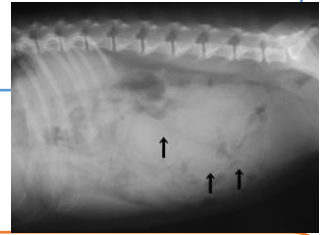
- オシッコに何か混じっている、ニオイがキツイ
- 立ち上がるのを嫌がる・散歩で歩きたがらない
- 体を縮こめる
- 抱っこしようとしたらキャンキャンと鳴いて嫌がる



等の症状がみられることがあります。

診断

問診・身体検査…避妊手術の有無、発情時期、陰部からの排膿などを確認します
超音波エコー検査…子宮の大きさや液体貯留がないか、子宮粘膜の腫れがないか等を見ます。
血液検査…子宮蓄膿症による炎症の程度や、全身への影響を評価します。



治療

ほとんどの場合手術による外科治療を行います

卵巣・子宮を摘出し、細菌に対して抗生剤の投与を行います。
感染している細菌が抗生剤に耐性を持っていることもあるために、細菌培養検査を行います。
子宮破裂が起こっていた場合は術中に腹腔内洗浄やドレーンチューブの設置を行います。
子宮蓄膿症の発見が遅れてしまい腎臓などの臓器に影響があったり、全身の状態がとても悪かったりする場合は麻酔・手術によるリスクが格段に高まってしまいます。

予防

避妊手術（子宮卵巣摘出）を受ければ、子宮蓄膿症にはなりません。
妊娠、出産をさせる予定がない場合は、若くて元気なうちに避妊手術を受けさせるとよいでしょう。



正常な子宮



佐々木先生のコラム

来院された飼い主さんは飼い犬・猫の状態や、ああして欲しい、こうして欲しいという内容を私たちに伝えると思います。この内容を「稟告（リンコク）」と言います。子宮蓄膿症と診断されるコたちの稟告はどういうものがあるか、個人的な経験から話してみようと思います。

子宮に膿がたまる病気だし、「外陰部から膿が出ている」という稟告が多いんじゃないの~と思っていてそのあなた！確かにそれもありますが、私が多いなと感じているのは「下痢」です。「数日前から下痢してて…」という未避妊の犬がきたら、子宮蓄膿症じゃないだろうな？と疑います。下痢を呈する症例のうちの多くは子宮蓄膿症ではないですが、「下痢以外の症状がない子宮蓄膿症」は、ともすれば見逃してしまう可能性があるため慎重に診察するようにしています。他にも、「目が赤いです」という稟告で子宮蓄膿症だったこともありました。

未避妊の中高齢犬で当てはまる「症状」がある場合は早めに受診するようにしましょう。